

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



原田さん(中央)による模擬授業で、公園づくりについて話し合う参加者(秋元和夫撮影) 2・3面へ

巻頭特集

18歳の1票 主権者教育セミナー

身近なテーマで政治に関心 2.3

キャリアデザインセミナー 就活の大学生を支援 4.5

第9回全国高等学校英語スピーチコンテスト 6.7

広がる世界わくわく学ぼう 読売ワークシート通信 8.9

ASIJで「ことばの授業」 10 お知らせ・短信 11 米コロンビア大学「コロンビア大のコア・カリキュラム」 12

2016.2

Vol.14

大阪、京都府、東京都で出前授業

今夏の参院選から選挙権年齢が18歳以上に引き下げられる見通しとなったのを受け、1月に大阪、京都府と東京都の3高で、読売新聞による18歳選挙権をテーマにした出前授業が行われた。

●堺市と高石市の合併を題材に 羽衣学園高

大阪府高石市の羽衣学園高校では1月20日、1年生102人を対象に、読売新聞東京本社の小松夏樹編集委員が講師を務めた。授業では、政治を身近に感じてもらうと、03年に行われた堺市と高石市との合併の是非を問う住民投票を題材に、3人から4人のグループごとに、賛成か反対か話し合った。生徒たちは堺市と高石市の人口と地方債、将来負担率などの資料を参考に、「堺市と合併すれば、ごみが無料になるのでは」や「高石のいいところ」が合併するとなくなりそうなので反対」など様々な意見を話し合っていた。

●少子化問題をテーマに 都立大田桜台高

一方、東京都大田区の都立大田桜台高校では1月25日、読売新聞東京本社の渡辺嘉久編集委員による出前授業が開かれた。渡辺編集委員は「難しく考えすぎず、自分の関心や一番身近なことでどの候補がいいかを選び、投票してほしい」と、3年生145人に呼びかけた。

少子高齢化が進む中、近年の国政選では20歳代の投票率は60歳代と比べ3分の1にとどまると説明。「投票に行かなければ意見は反映できない」と18歳選挙権の意義を説いた。



ホワイトボードに支持する案の紙を貼る生徒たち

●模擬投票を実施 京都学園高

また、翌26日には京都市右京区の京都学園高校でも、渡辺編集委員による出前授業が行われ、同校の1年生約160人に読売新聞の紙面を示しながら、国内外のニュースや世論調査の方法などを解説。20歳代の投票率が低い傾向にあることに触れ、「自分が生きやすい社会を実現するためにも、必ず投票に行くべきだ」と述べた。続いて、少子化や待機児童対策を巡り、3人が争う架空の選挙を想定した模擬投票を実施。生徒たちは各候補者の政策を比較し、票を投じた。

読売新聞は主権者教育に関する中学、高校への記者の出前授業を行っています。申し込みは
<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/senkyoken/>

ドイツの政治教育
よい妥協を探る力育成

近藤孝弘 早大教授

日本では政治教育が大切だと分かっているが、保護者から中立的ではないと批判されるのではという不安が先生の間に広がっている。

ドイツの政治的中立性とは、色々な考え方がある中で、その真ん中という意味ではなく、意見を幅広く紹介することを意味する。中立性は批判を受けないためではなく、多様な意見を持つ生徒が活発に議論するために必要だ。

ドイツの政治教育は、自分とは異なる意見をよく理解した上で、良い妥協を探る力なども育てようとしており、直接的に民主主義社会を支える有権者を育てることを目指す。

日本は政治制度の知識の伝達を重視してきたが、現実の政治問題に目を向ける必要がある。政治家の演説や研究者の論文などの資料の分析も政治教育には有効だ。



指導に話し合い活動を

梶山正司 文科省主任視学官

文科省は昨年末、政治や選挙に関する高校生用の副教材を配布した。国民から選ばれた代表者が、議会で法律や予算を決定する制度下では、選挙は最も重要な手段だということ

を踏まえてほしい。

指導する際は、特に話し合い活動を取り入れてほしい。自分の意見を述べ、異なる意見にも耳を傾けて合意形成する力を育てることが求められている。結論に至る議論の過程を大切に、生徒の考えや議論が深まるように様々な見解を示すことも重要だ。

選挙管理委員会や選挙啓発団体などと連携すれば、学校の負担が軽減できる。現実の政治課題を取り上げる際は、特定の政党を支持したり批判したりしないことが大切だ。個人的な主義主張を述べることは避け、中立かつ公正な立場で指導してほしい。

大学に期日前投票所設置で
投票率アップ

大隅哲平 松山市選管主任

若年層の投票率を高めようと、2013年の参院選で、全国に先駆け、松山大のキャンパス内に期日前投票所を設置した。年代別の投票率が10年の参院選を軒並み下回る中、20歳代前半だけが約3ポイント上がった。

若者を巻き込んだ参画型の活動も進めてきた。大学生や高校生を「選挙コンシェルジュ（案内人）」に認定。現在約30人が選挙啓発活動の企画・立案・実施に取り組んでいる。また、大学サークルなど12団体約300人を「選挙クルー」に認定し、投票呼び掛けなどの活動を進めてもらっている。

私は高校などでの出前授業も年間約40回実施し、高校生に本物の投票箱、記載台などを使った模擬投票、開票作業などを体験してもらっている。全国の選管も先生方からの相談を待っているはずだ。



公園づくりのアイデアを発表するグループの代表者(左端)。右端は原田謙介さん

原田さんの模擬授業「公園をつくろう!」

「18歳の1票 主権者教育セミナー」が1月24日、読売新聞東京本社で開かれた。昨年11月に続く2回目で、約90人が参加した。ドイツの政治教育に詳しい早稲田大の近藤孝弘教授が講演し、文科省の梶山正司氏が高校生用の副教材について説明。松山市選挙管理委員会の大隅哲平氏が活動の実践例を紹介した。また、NPO法人「ユースクリエイト」の原田謙介代表による模擬授業も行われた。（この記事の本文は読売新聞の教育面で2月12日に掲載されました）

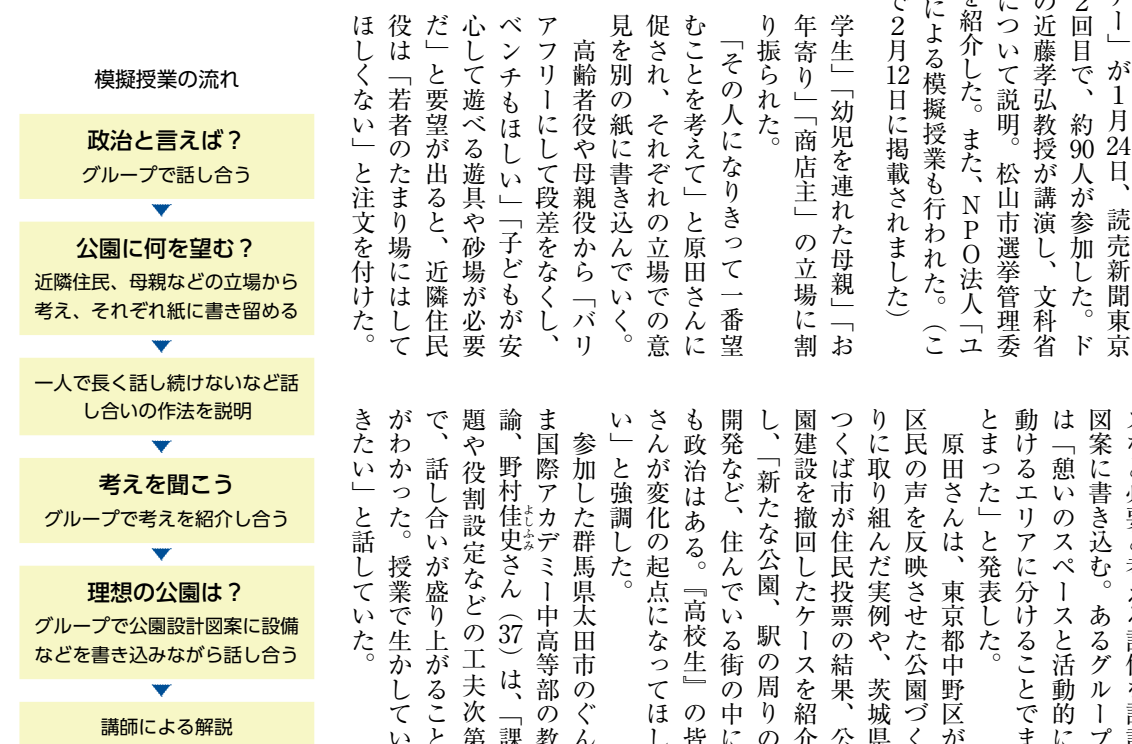
教員らが生徒役に

「各グループは一つの街です。新たな公園をつくる案について、どうしたらより良い公園になるか考えましょう」

原田さんの呼びかけで、参加者が「高校生」になったの模擬授業が始まった。

選挙権年齢が18歳以上に引き下げられるのに向けて、高校生らの政治参加意欲を高めることが急務になっている。ユースクリエイトは全国各地の高校などで出前授業をしている。独自の主権者教育プログラム「公園をつくらう!」は、身近なテーマで、政治に興味を持ってもらうのが狙いだ。

5、6人ずつからなるグループには、公園の見取り図を記した「公園設計図案」が配られ、メンバーは「近隣の住民」「中



18歳の1票

主権者
教育セミナー

身近なテーマで政治に関心



就職活動を振り返る内定者ら(1月30日)

恐れがある」との意見を発表した。別の女子学生は家計面の「脱スマホ依存」を選んだ。「スマホでゲームや検索が簡単にできてしまうので、それに時間をとられて、思考力の低下や運動不足を招いたり、歩きスマホによる事故などが増えたりする」と述べた。

男子学生は、NIE面の18歳選挙権の記事を読んで、「実は一度も投票に行ったことがないけど、これから自分より年下の人がどんな風に投票するのか気になった」と告白。「今の政治は高齢者向けの政策が中心。若

者が投票するようになれば、政治も若者の意見に耳を傾けるはず」と予想した。

全員の発表が終わった後、このテーマに話題が集中。「今の日本では思考力を養う教育が行われていないので、若者がちゃんと日本の政治のことを考えて投票するだろうか。人気投票になってしまいう可能性もある」と選挙権年齢の引き下げに疑義を呈する声も上がった。一方で、「候補者のウェブサイトを見ても、いいことばかりしか書いていない。客観的な情報を得る手段がある」との提案もあった。

お互いにとっても初対面とは思えないほど、リラックスした雰囲気や議論が展開したが、これは会場全体に共通していた。新聞がものごとを考えるきっかけになることを実感できたグループワークとなった。

内定者を取り囲んで質問攻め

プログラム終了後、内定者や採用担当者に対する質疑応答タイムが設けられた。パネルディスカッションで質問を募っても、手を上げにくいのに配慮した手法で、学生たちは話を聞きたい内定者を取り囲んで質問攻めにした。

「長い就活の日々でモチベ



新聞を活用したグループワークに取り組む学生たち。中央は阿部淳一郎さん(2月8日)

マスコミ、金融、商社、メーカー 業種別に4回

内定者、採用担当者によるパネルディスカッション

セミナーは各回とも最初に、「就職レディネス・チェック」シートを用いて、就職活動に対する意識や準備度を各自で確認。引き続き、人材開発コンサルタントの阿部淳一郎さんをコーディネーターに、各業界の内定者4人と採用担当者1人を加えた計6人によるパネルディスカッションが行われた。

志望業界はどのように絞っていったのか、業界研究や企業研究、自己分析はどのように進めたのか、など内定者の体験談が生の言葉で語られ、参加した学生は熱心にメモを取りながら聞き入っていた。

セミナーの目玉は、阿部さんによる新聞を活用したグループワーク。各自、その日の読売新聞朝刊で気になった記事を1つピックアップし、「なぜ気になったか」「それが社会にどんな影響を与えると思うか」を考え、4〜6人ずつのグループの中で共有、議論するというシンプルな内容だ。



学生たちの質問に答える内定者(2月12日)

ションを維持するために行っていたことはありますか」「早く内定が出る業界ってありますか」など就活全般に関してのアドバイスや情報を求める質問のほか、「総合商社での面接で、自分はこれがしたいって希望職種を限定してしまっているんですか」「地味な仕事が好きなので事務職を希望しているのですが、そんな風に答えたらまずいでしょうか」など、個別具体的な面接対策も気になっている様子だった。

内定者はそれぞれの質問に丁寧に答え、学生たちは納得したような表情でうなずいていた。

就職活動に取り組む大学生を支援する「キャリアデザインセミナー」(読売新聞社主催)が1月30日から2月12日にかけて、志望業種ごとに4回にわたって行われ、計319人の学生が参加した。初回のマスコミ志望者向けは東京・大手町の読売新聞東京本社で、金融、商社、メーカー各志望者向けの3回は東京・渋谷のダイヤモンド社石山記念ホールでそれぞれ行われた。読売新聞でのセミナーでは会社見学も行われ、参加した学生からは「企業の雰囲気が分かってよかった」と好評だった。

学生たちはお互いの関心や考え方の違いに新鮮な驚きを感じながらも、楽しそうに議論していた。同じ業界を目指す他大学の学生と交流できたことも大きな収穫になったようだった。

阿部さん「つながりと未来への変化の認識を」

阿部さんが4回のセミナーで強く訴えたのが新聞の重要性。各回とも、新聞活用ワークに先立ち、「最近、気になるニュースはありますか?」となぜ企業

は質問するのか」と題して講義を行い、新聞が就活に有用な理由を分かりやすく解説した。阿部さんは、企業が面接で見極めようとしているのは「仕事で結果を出せそうか?」「仲間としてうまくやっていけそうか?」の2点しかないと言。それに答えるために面接で述べべきことは「私は○○な仕事を通じて、○○な人々に、○○な形で貢献したい」という志望動機であると強調した。

新聞は考えるきっかけ

金融業界志望の学生たちが集まった2月3日のセミナー。最前列のグループをのぞいてみると、全員見事に別の記事を選んでいった。

ある女子学生は生活面に掲載されていた「電力自由化」の記事に注目。「料金が安くなると大量に電気を使うことに抵抗がなくなり、環境破壊を助長する

●商社

大変刺激になった。女子大なので男性の考えを聞いたのも参考になった。新聞を使ったワークでは、こんな見方ができるのか、と勉強になった。視野が広がったと思う。図書館などを利用して、意識して新聞を読みたい。

橋本潮音さん(フェリス女学院大3年)

●メーカー

内定者から率直な声を聞けてよかった。同じ記事でも、個人の経験や背景が違えば、いろんな見方があると実感できた。たくさんのOBに会い、考えて業界や企業を絞っていきたい。

三枝尚輝さん(早稲田大3年)

参加者の声

●マスコミ

新聞ワークでは、気になった記事が人それぞれ違ったことが面白かったし、記事の内容を解説しあって勉強になった。会社見学で、新聞ができるまでの流れを説明してもらい、記者になりたい気持ちが強くなった。

長尾里穂さん(慶應義塾大3年)

●金融

新聞を読む大切さを教えてもらったのが良かった。環境問題に関する記事を紹介してくれた人がいたが、私だったら見過ごしてしまうと思った。みんなで新聞を読むことで、いろいろな問題意識を持っている人がいることに、気づいた。

児玉梨花さん(日本女子大3年)



読売新聞東京本社の編集局を見学する学生たち(1月30日)

第9回全国高等学校英語スピーチコンテスト

文部科学大臣賞にブラダンさん
外務大臣賞に東恩納さん

第9回全国高等学校英語スピーチコンテスト（全国英語教育研究団体連合会主催、読売新聞社など後援）が1月31日、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた。地区大会を勝ち進んできた18人が出場。12人が出場した第1部は、1位の文部科学大臣賞にネパール出身のシュレヤス・ブラダンさん（岡山県立岡山朝日高2年）、第2部の1位外務大臣賞は東恩納盛南さん（沖縄尚学高1年）に輝いた。



地区大会を勝ち進んで出場した参加者ら

第1部
1位被災国への支援のあり方
シュレヤス・ブラダンさん

出身国ネパールで昨年4月に起き、9000人が亡くなった大地震を題材にとって援助のあり方を考えた。日本を含め各国が支援を表明したことに安心したもの、ネパールにとって支援が本当に有効なのかどうか、懐疑的になった。

政府高官たちの私物車や、飛行機のファーストクラスのチケットになるのではないかと……。実際、2010年に起きたハイチ大地震を見ると、発生から5年たった今も8万5000人がキャンプで暮らしている。

そこで出した提案が、不要不急なものに使われる可能性が



る寄付ではなく、新しい技術の移転や雇用機会を増やす投資を、と呼びかけることだった。

「究極の目標は、外国からの援助のくびきから解放されることだ」と結論付けた。米ウォールストリート・ジャーナル紙、英ガーディアン紙、英BBC放送や百科事典を引用し、説得力のあるパフォーマンスだった。

ブラダンさんは中学3年だった2013年、高円宮杯第65回全日本中学

第2部
1位異文化交流の重要性
東恩納盛南さん

立つ、として年間2万人の難民受け入れ案を支持する、と主張。「文化の交流から新しい考え方は生まれ、架け橋を創造する道具にもなる。変化を恐れてはいけない」と訴えた。

最後に、「この架け橋は未来の日本へ導くことになる。そう思いませんか？」と言って、再び首を左右に振るジェスチャーをして、喝采を浴びた。

指導に当たったトーマス・ミツチエル教諭も「彼は、中学時代も生徒会長をやった頑張り屋さん。授業では時事問題を掘り下げるために新聞を調べさせている」と1位を喜んでいて

第1部
2位
日本の若者の政治意識
奥はんさん

18歳の選挙権というホットな話題を取り上げた。

昨年交換プログラムでスウェーデンを訪問した際、現地の友達に「支持する政党はある？」と問われたことをきっかけに、彼等の政治に対する意識の違いを認識した。

スウェーデンでは学校で選挙権のない生徒たちによる模擬投票があり、学校に政党の青年部

ドでも同性婚を支援するチャリティが学校で催され、性的少数者（LGBT）への理解が世界で進んでいる現状を報告した。

一方、自分の友達がゲイだと告白した際の周囲の反応が必ずしも、理解しているとは言えない雰囲気だったことも付け加え、差別は人類の最も醜悪な特徴だ、と断じ、その例として、性差別、人種差別、それに自分

を招いてディスカッションしてもらおう。「若者には、自分たちの社会を変える力があるという信念がある」と感じた。

一方、日本はどうか。20代の投票率は低く、選挙への関心も少ない。

現状を見た上で「すべての学校で模擬投票を」と提案する。各政党の政策を調べて、それぞれの長短を分析する。そして投票して、最後に実際の選挙結果と比較してみる。こうすれば、日本の未来を形成する責任感を持つようになる」と訴えた。

奥さんは「スウェーデンで話題についていけなかった経験をテーマにすれば、タイムリーだと思った。スクリーンを頭に入れた、観客の目をしっかりと見ながら話せたのがよかった」と語っていた。

「やった、という感じ。原稿を作るとき、自分が何を伝えたいのか、を自分の中でしっかりと固めるのが大変だった。自分の思いは十分伝えられたと思う。伝えたいメッセージの骨を一本残して、そこから枝分かれしすぎないように、という先生のアドバイスが役に立った」

3位
仙北谷侑希さん

「最初は日本の英語教育をテーマにしようと思ったが、先生からアドバイスを受け、アイヌ語にした。アイヌ語の資料を読んだり、ビデオを見たりして、初めて知ることが多かった。その上で作った原稿を、感情を込めて発表できたのがよかったと思う」

4位
中村真央さん

「やった、という感じ。原稿を作るとき、自分が何を伝えたいのか、を自分の中でしっかりと固めるのが大変だった。自分の思いは十分伝えられたと思う。伝えたいメッセージの骨を一本残して、そこから枝分かれしすぎないように、という先生のアドバイスが役に立った」

ほかの人のスピーチを聞くことができて楽しかった」と喜んだ。

第2部
2位
少数者に対する差別
高木サブリナさん

最初に聴衆への質問で始まった。「私がゲイだ、と言ったらどう感じますか？」

はっとするような出だしで、緊張感を与えることに成功した。米連邦最高裁が昨年6月、同性婚を合憲と認めた判決を紹介。米国だけでなくニュージーラン

「彼らに対して出来ることは何もないが、同様の境遇にある人を助けることはできる」と語り、日本での多くの難民の受け入れを提案した。

日本の少子化問題解決にも役

登録者数
8000人

広がる世界 わくわく学ぼう

校内ポストに投函 仙台市立七北田小

仙台市立七北田（ななきた）小学校（森屋勝治校長）は、「読売ワークシート通信」を全校的な取り組みとして活用している。児童が校内の「NIEポスト」に投函した解答を、森屋校長が自ら採点し、担任から返却する仕組み。自主的に参加する児童は毎日10～20人に上るといふ。

同小では、今藤正彦教諭が中心になってワークシート通信を活用してきた。昨年9月、児童が通る多目的スペースにあるNIEコーナーにワークシート通信を貼り、持ち帰れるようにコピーを置いた。宿題とはせず、児童が自ら参加するようにしたため、初日に校長室前のNIEポストに投

函されたのは、わずか2通。しかし、楽しそうに取り組む児童に触発され、2～4年生を中心に徐々に広まったという。同小2年の女子児童は「難しいところは親に聞きます」「（決まった答えがあるのではなく）自分で考える問題が面白い」などと話していた。

NIEコーナーには、同小の卒業生で、ソチ五輪フィギュアスケート金メダリストの羽生結弦選手が登場する記事も貼ってある。森屋校長は「記事には生の出来事が登場する。授業で育んだ力を使って、それを読み解こうとする児童が増えてくれれば」と話している。



いつでもワークシートが手に取れるNIEコーナーの前で問題を読む児童たち

日本の裏側でも新鮮な記事 パラグアイ・アスンシオン日本人学校

南米・パラグアイの首都にあるアスンシオン日本人学校（田口克敏校長）では、昨年11月から、中学生が「読売ワークシート通信」に取り組んでいる。パラグアイは南米大陸のほぼ中央に位置し、人口約700万人。農業が盛んで、大豆の輸出国として知られる。戦前から日本人が移民し、日系人も少なくない。

昨春、パラグアイに着任した田口校長は、中学生の社会科の授業を担当して、生徒たちが「日本の情報から隔絶されている」と感じた。日本語の新聞は入手が難しい。テレビはNHKだけが視聴できるものの、ニュースの時間は限られる。

「海外にいるから『国際理解』も深まるだろうと単純に考えがちですが、日本の事情に疎くなると、国際理解の基盤となる自国理解が疎かになってしまいます」と言う田口校長は、以前から教育記事のチェックに使っていた「ヨミウリ・オンライン」で、「ワークシート通信」の紹介を目にして早速申し込んだ。

インターネット経由なら国内と同時に、日々の新鮮な記事で作られたワークシートを入手できる。日本にいたときから、新聞が読める力を中学生の段階で付けさせたいと考えていた田口校長は、ほぼ毎日、1枚ずつシートを渡し、翌日の朝、通学バ

スを降りた生徒たちから回収することにした。しかも、ワークシートの問題に解答だけでなく、要約と意見も課した。ノートの左側にワークシートを貼り、見開きの右ページに、原稿用紙のプリントを貼って要約と意見を各150字以内で書く。集めたノートには、田口校長自身が目を通して

課題が出るようになって、最初は「そんなに書くの、うーわっ」と思ったという男子生徒は、「書かれている文はとても勉強になりました。スラスラと300字書けるようになりました。今まではネットニュースを見て深く考えることはなかったのですが、ワークシートに書かれている内容を見て今の日本について知ることができるようになりました」と書いた。ほかの生徒からも「海外ではなかなか得られない情報を得ることができました」「興味のある記事が多かったです」「国語の力と社会の力がつく」といった感想や、家でテレビを見ていて「この話題知っている」ということが増え、課題が楽しくなってきたという報告が寄せられている。

4月からは、小学生も含めて、全児童生徒にワークシートの取り組みを始めたといふ田口校長は考えている。



ワークシートを貼った生徒のノートをチェックする田口校長=上、日本人学校の校舎=左（いずれも田口校長提供）



小学1年生から中学・高校生まで
多様な難易度のシートを提供

新聞記事が教材に

学校での新聞活用を支援するため、読売新聞社は毎週、「読売ワークシート通信」を教材として先生方に無料配信しています。登録者数は8000人を超え、現場の先生が使い方を工夫したり、日本語の新聞が手に入りにくい海外で親しまれたり、活用する方法はさまざまです。

通信が始まったのは2009年4月。今ほど教科書で新聞を取り上げられていない時期で、新聞と子どもたちをどのように結びつけたらいいかを考えている先生の参考になるようにと企画。読売新聞や英字紙「The Japan News」の記事を切り抜いて設問と解答欄をつけ、A4判1枚のシートにまとめたものです。

聞が創刊されたため、記事の種類も増え、子どもたちの成長度に応じたふりがな付きのシートや、複雑なニュースをわかりやすく解説するシートが提供できるようになりました。

朝学習や授業の冒頭などで日常的に利用するほか、家庭学習で生かしている例も多く、「社会への関心が高まった」「自分の意見を表現する力がついた」「学力テストの成績がアップした」といった感想が寄せられています。教員の多忙さが話題になる中で、手軽な教材として使われる一方、自ら設問を考え独自のワークシートを作るようになった先生方もいて、新聞活用の幅を広げるのに役立ててもらっています。

配信対象は、原則として小中高の教員および学校司書。まずは「読売教育ネットワーク」へご登録ください。参加登録の際には、「読売ワークシート通信」希望シート（小学校版か中学校版か）選択欄にチェックを入れてください。

参加登録、配信お申し込みは
読売教育ネットワーク

<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/>

新聞記事教材

読売ワークシート通信

アメリカンスクール・イン・ジャパン

記事の書き方学ぶ in ASI J

インターナショナル・スクールで初開催



記者パソコンで打った見本の原稿を映し出して授業をする瀬尾さん(中央)

読売とACEの

「ことばの授業」

読売新聞社がNPO法人企業教育研究会(ACE)と10年以上にわたって展開してきた「ことばの授業」が、2月

15日、英語を主言語とするインターナショナル・スクールで初めて開かれた。

授業を招請したのは、東京都調布市にある「アメリカンスクール・イン・ジャパン」(ASI J)。中学生約60人が、読売新聞教育ネットワークの佐藤伸専任部長とACEの瀬尾悠太さんの軽妙な掛け合いに導かれ、「新聞記者になろう」をテーマにメモの取り方から簡潔な記事の書き方までを学んだ。

授業は、日本語を母国語並みのレベルでしゃべれる生徒20人前後のクラス3組を対象で、それぞれ80分間にわたって行われた。最初に、記者が使う取材用のメモ帳を渡された子供たちは興味津々。瀬尾さんが、記者メモ帳と学習用ノートの違いを尋ねると、「罫線がない」「小さい」などという指摘に加え、「紙が薄い」といった鋭い観察が飛び出し、講師陣をたじとさせる場面もあった。

千葉大学教育学部などを母体とするACEは、2005

年以来、読売新聞とともに「ことばの授業」を毎年全国約60校で実施してきたが、日本語を教えるという特性もあって、これまでインター校での実施例はなかった。パリやカイロ、ジュネーブに駐在経験のある佐藤部長は今回、生徒たちが日本語での説明についてこられない事態に備えて英語で補足する準備をしていた。

ところが、ふたを空けてみると生徒の理解度、表現力は高く、取り越し苦労に終わった。授業のクライマックスは、学校での「事件」を伝える動画を見て、記事にまとめる課題だった。締め切りまで15分間という制約があったが、生徒たちは学んだばかりの記事化の技術を駆使して、立派な文章に仕立て上げた。

授業で積極発言したK君(12)は、「前にいた学校でも新聞記事のコピーを渡されて作文する授業はあったけど、今回は映像を見て自分で記事を書けた。とても面白かった」と感想を語った。首都圏に住む外国人駐在員



記事を書く上での注意点を説明する佐藤専任部長(右)

の子弟らが通うASI Jは、幼稚園から高校生まで、38か国の国籍を持つ計1500人が通う。英語で高水準の教育を施していることで知られ、卒業生の多くが米欧の有力大学に進む。一方で、2015年には「ジャパン・センター」を開設、生け花から折り紙まで日本の言語や文化の学習にも力を入れている。これが、子供たちの表現力を高める社会貢献活動を進める読売新聞の意向と一致し、今回のコラボが実現した。ASI Jの読売教育ネットワーク参加も決まった。

ASI Jジャパン・センターの高野京子ディレクターは、「日本にある学校として、日本語学習は充実させたい。『ことばの授業』のようなハンズオン(実践的)なプログラムはありがたい」と述べた。

News

卒業をテーマに 写真コンテスト ——読売中高生新聞

読売中高生新聞では「卒業」をテーマにした写真コンテストを開催します。苦楽を共にした友達との別れ、お世話になった恩師との涙の抱擁、お母さんが作ってくれる最後のお弁当など、あなたなりの「卒業」を写真に撮って送って下さい。在校生の参加も歓迎です。自由な発想の作品をお待ちしています。グランプリ、準グランプリを初めとする優秀作品は読売中高生新聞で4月に紹介する予定です。



- 【応募資格】 中学生、高校生
 【締め切り】 3月15日(郵送は当日消印有効)
 【応募方法】 ①題名 ②名前 ③住所 ④電話番号 ⑤学校名 ⑥生年月日 ⑦作品に込めた思い(100~300字) ⑧デジタル処理をした場合、その具体的内容を明記の上、画像データをメール添付で送信、またはプリントを郵送してください。学校単位での応募の場合は担当の教諭の連絡先も記載してください。
 【あて先】 ■メール chukousei@yomiuri.com
 ■郵送 〒103・8601 日本橋郵便局留 読売中高生新聞「卒業写真コンテスト係」

応募についての詳細は、ヨミウリ・オンラインの中高生新聞コーナーをご覧ください。
<http://www.yomiuri.co.jp/teen/special/20160208-OYT8T50128.html>

2020 TAKUSHOKU NEW ORANGE スポーツフォーラム オリンピックが語る『夢の叶え方』

ロンドンオリンピック競泳メダリストの寺川綾さんと拓殖大学的女子アスリートたちが集い、2020年に向けた「夢」を語り合います。春のオープンキャンパスも同日開催します。

- 【日時】 2016年3月20日(日・祝) 13:00~ 14:30(受付開始12:30~)
 【会場】 拓殖大学文京キャンパス 後藤新平・新渡戸稲造記念講堂
 東京都文京区小日向3-4-14(東京メトロ丸ノ内線茗荷谷駅 徒歩3分)
 【定員】 300人(先着順) 入場無料・事前申込不要

- コーディネーター 小田貴子(フリーアナウンサー/外国語学部卒)
 ■オリンピック 寺川 綾(ロンドンオリンピック競泳背泳ぎ100m銅メダリスト)
 藤野舞子(商学部卒 北京オリンピック400m個人メドレー代表選手)
 ■女子学生アスリート 女子バスケットボール部 橋本美華(商学部経営学科4年)
 空手道部 建部美希(国際学部国際学科2年)
 ボクシング部 山田夏冴(政経学部経済学科1年)

主催:2020 TAKUSHOKU NEW ORANGE PROJECT 後援:読売新聞社
 【問い合わせ】 拓殖大学広報室 ☎ 03・3947・7160

3/29に 関西大会 中学生ビブリオバトル

活字文化推進会議は3月29日(火)正午から、大阪大学中之島センターで中学生ビブリオバトル関西大会を開催します。

- 【日時】 3月29日(火)
 12:00~(受付11:30~)
 【場所】 大阪大学中之島センター
 (大阪市北区)
 【対象】 関西2府4県(大阪、京都、兵庫、奈良、滋賀、和歌山)の中学生(現3年生含む)
 【応募方法】 学校長推薦もしくは各校で校内予選を実施、代表を決定し、「関西大会出場希望」と明記の上、①学校名、学年 ②発表者名(ふりがな) ③紹介する本、著者、出版社 ④担当教諭(司書) ⑤電話番号を記入して事務局までお申し込み下さい。発表者の決定が遅れる場合、学校名だけの仮エントリーも可です。先着20校まで。なお観戦も申し込みが必要です。
 【送信先】 FAX:03・3217・4309
 メール:bib@yomiuri.com
 【問い合わせ】 読売新聞東京本社
 活字文化推進会議事務局
 ☎ 03・3217・4302(平日10:00~17:00)

高校ビブリオバトル 新年度の予定

決勝大会は2017年1月8日(日)に、よみうり大手町ホールで開催します。

都府県大会は新年度、群馬、岐阜、宮崎などで新たに開催を検討しています。ブロック大会は、北海道(10月2日、北海道大学)、東北(9月4日、東北大学)、関東・甲信越(未定)、北陸(8月7日、石川県政記念いのき迎賓館)、東海(9月25日、椋山女学園大学)、関西(未定)、中国(未定)、四国(7月23日、松山東雲女子大学)、北部九州・山口(11月13日、西南学院大学)の9大会です。

ブロック大会、都府県大会の開催情報は21世紀活字文化プロジェクトのウェブサイトへ
 → <http://katsuji.yomiuri.co.jp/>



ポスターセッションで来場者に説明する中学生

ネットワーク参加企業が出展 奈良市「交流の集い」

地域で取り組む教育活動を報告し合う奈良市の「交流の集い」(同市教委など主催)が2月13日、同市のなら100年会館で行われました。市立中学校の校区ごとに活動する21の地域教育協議会が、それぞれ成果を紹介し、参加者らが意見交換しました。

各協議会は、中学校の斜面の雑草対策に羊を飼って地域と中学生で世話をしている様子、垂仁天皇陵や唐招提寺、薬師寺などがある校区では地域ぐるみで史跡の清掃や伝統文化の体験、または梅や紅花染め、竹炭など地域の特産を生かした活動などをそれぞれポスターにまとめて順番に発表しました。

会場では、子どもたちが手作りしたお菓子やせっけんなど「学区ブランド産品」の販売も。企業・団体・大学もブース参加し、読売新聞ほか読売教育ネットワーク参加企業の関西電力や大阪ガスが、学校支援プログラムを紹介。別会場では、中学生が地域の大人から職業について学習したことを来場者に説明し、どの発表が良かったかを投票してもらう「ポスターセッション」も行われました。「地区の茶農家の思い」「保育士の裏側」「お客様が快適に過ごす工夫」といった題名で手作りの写真や説明文を掲示しながら、元気よく学習の成果を披露しました。

海外で学ぶ・リレーエッセー ⑭

米コロンビア大学
「コロンビア大のコア・カリキュラム」

渋谷教育学園渋谷高卒、米コロンビア大学2年

加瀬彩乃さん



加瀬彩乃さん(前列右から2人目)(本人提供)

「ラウンジで『リア王』のリーディング！」

同じ階の寮生一人からテキストを受け取ると、自分の本をつかんでよろけながらラウンジに出た。10人ほどの寮生がもうシエークスピアの「リア王」のコピーを手にカウチに座り込んでいた。と言っても私たちは英文学専攻でもなければ、シエークスピア・マニアというわけでもない。経済、医学、コンピュター科学を専攻する学生たちが、この英文学の演劇の古典を熱心に大声で読んでいた。

これは古典文学と呼ぶコースの多くの科目の一つだ。コロンビア大に進学した1年目の学生は全員、履修する。この前後期一年間のコースでは、西欧文学



の名著を教材にする。ホメロスやドストエフスキー、個人的に好きだった聖書なども扱う。1週間に2回、1回2時間の授業で、20人の学生と教授一人が、1週間に読む200ページをベールに深いディスカッションを行う。時には、本を閉じ、キャンパスの外に出ることもある。バスに乗ってメトロポリタン美術館へ行き、イーリアスの一場面を描いた古代ギリシャのつばを調べる。フリック・コレクション(美術館)には地下鉄で行き、ドン・キホーテのタペストリーを精査した。学習体験を豊かなものにしてくれる。これこそ、ニューヨークという大都市で学ぶ特権だ。

古典文学はコロンビアの「コア・カリキュラム」の一つであり、哲学から科学まで、コロンビア大生一人ひとりが取得しなければならない。四年制の学生として、私は「政治哲学」を取った。これは、ある一つの社会の宗教、政治、経済、哲学的な価値を精査することによって、様々な社会の諸問題を理解しようとするものだ。「コア」は全学生が同じ書物を開け、批判的な対話に関わる、という共同体的体験だ。授業は自分の専攻には直接的には役立たない、と言って「コア」を実際

ではない、と否定するものもあるかもしれない。けれど私にとって、欠くことができない学習の機会だ。広い知識とものの見方に触れることで、少数数クラスを通して自分のものにできるからだ。普通だったら目に留まらないような問題に目を見開かせてくれる機会であり、そうすることで、専攻選択への展望を開かせてくれるのだ。そして、寮のラウンジで見られる光景のように、「コア」は、コロンビア大の多様な学生を共通の学習を通して一つにまとめることができる。「コア」がなければ、コロンビアを経験した、とは言えないだろう。

(会報編集部抄訳 The Japan News 2015年9月11日)

コロンビア大学

米ニューヨーク市にある1754年創立の総合大学。植民地時代に英国国王ジョージ2世の勅許により、キングズカレッジとして創立され、全米で5番目に古く、アイビーリーグの一つ。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。